
狼の少女

涼宮 真紅郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼の少女

【Nコード】

N2033I

【作者名】

涼宮 真紅郎

【あらすじ】

俺は須川克^{すがわすけ}高校一年生だ

ある日いつもどおりに家に帰っていたら女の子が俺をつけてきてたんだ。

しかもかなりの美少女で何だと思ってたらいきなり「私の彼氏になってください！」って言われたんだ。いきなりだったからつい返事しちまったけど、

しかも自分はヒトではない狼の化身だって言われた。しかも命を狙われてるときたもんだ。

それから俺は彼女を守るために戦うことになった。

プロローグ・はじまり

「疲れたーっと。」

道を歩く一人の少年。

「・・・誰かに見られてる気が・・・。」

きよろきよろと辺りを見る。

「気のせいかな？」

また歩き出してしまふ。

少年が角をまがってすぐに一人の少女が屋根から飛び降りてきた。

「やっと見つけた。」

彼女は嬉しそうに言つと、少年が行った方向を追い始めた。

第一話・出会い

闇の中。

俺は闇の中。

闇の先にはやさしい笑顔。

俺を見て微笑んでくれる優しい笑顔。

でも、もう見れない。

見れなくなった、俺が、すがわすくろ須川克が………奪った。

「ハアツ……！ハアツ……！」

そこで目が覚めた。

手に汗、体中から脂汗が出ている。

もう、何度目だろうか。

俺が奪った暖かな笑顔……。

「……かあさん……。」

俺の家には家族がいない、と言っても別居しているだけだ。

家族とも電話で話している。

学校に親友もいる。

寂しくはない、けどあんまり良くもない。

今の俺は登校中……

学校は俺の家から歩いて十五分で着く。

私立加住ヶ丘高校かすみがおか

これが俺の学校の名前だ。

今は一人だがそろそろ騒がしくなる。

「克ッ！」

この声は、後ろを見ると一人の女の子が走ってきた。

「もゝ。待っててって昨日言っただでしょ。」

こいつは幼馴染の岸原智香きしはら ともか

なぜか俺がこつちに来た時、一緒についてきた。

なぜかその理由も教えてくれん。

「だって智香が遅いんだもん」

「そんな子供じみたことを言うな！」

怒られた。

智香は世話焼きでちっちゃい頃から色々と思痴られている。

智香は俺から見てもかわいい、学校でもかなり人気があるらしい。

あるらしいってのは実際見たわけじゃない。

友達から聞いたことだ。

「我が女神の智香ちゅあゝん！と克おはよう。」

こいつがさっき言ってた友達。

おおいし みよし
大石三吉一応、親友の部類に入る。

かわいい子には目がないアホ。

「うっさい！なにが女神だよ！」

「へぼお！」

そのまま三人で登校した。

いつもと変わらない。

いつもと同じ。

それが嬉しくもあり、同時に自己嫌悪にもなる。

そんなこんなで帰り。

誰かにつけられている俺。

ここ最近視線を感じていた。

何か悪いことしたっけ？

ともかく俺は角をまがった所で待ち伏せすることにした。
足音が近づいてくる。

俺は一気に飛び出した。

「誰だ！」

「きゃっ！」

「・・・ん？きゃっ？」

「あ、あの・・・。」

俺が馬乗りになっていたのは・・・

さらさらの銀髪、パツチリとした目、雪の様な肌

まぎれもない美少女だった

「・・・すまないが、俺をつけてたのはあんたか？」

動揺を隠して聞いてみる。

「あつ。バレてました？」

否定しないよこの子、なぜ俺？

「何で俺をつけてた。」

「あ、理由を話すからそろそろ、どいてくれると・・・。」

そうだね、はたから見ると俺怪しい。

「・・・すまない。」

クールを装ってるけど内心バクバク。

「それで、なぜ俺をつけていた。」

改めて聞いてみた。

「あ、あのですね。」

何が目的なんだ？

「あの、私の彼氏になってください！」

「・・・は？」

「・・・何？」

彼氏、ってあの彼氏彼女の？

「だめ、ですか？」

「いや、まあ、いい。」

あ、返事しちゃったよ。

「ホントですか！よかった。」

ま、いつか。

「あ、自己紹介な俺は須川 克、それであんたの名前は？」
「ないです。」

「……はい？」

「ないって名前なのか？変わった名前だな。」

「あ、いえ、そっちじゃなくて名前はないんです。」

「……まて、どう見ても同じ年の女の子だ。十六年間も名前がない？
「どう言うことだ？」

「あの、信じてもらえないかもしれないけど私、ヒトではないんです。」

何を言ってるんだこの子は。

「人じゃないとしたら何なんだ。」

「狼の化身です。」

狼の化身？

「はあ、そんなファンタジーなことを信じると？」

「証拠もあります。」

そう言っただけで彼女は腕を出してきた。

「んっ！」

「おわあ！」

彼女の腕が狼の腕になり、爪が伸びた。

「嘘だろ。」

「現実です。」

頭がついていかないが、なぜかショックはあまり受けなかった。

「この世界には私みたいな化身は何千体もいます。」

「ちよつとまってくれ……。」

この子は人じゃなくて化身？その化身が彼女？しかもこの子みたいなのが何千体もいるって？

「……アホらし。」

「アホらしいかもしれませんが、現実です。」

「ま、信じるか。」

「だから……って、え？」

「信じてやるって言ったんだ。」

「・・・・・・ホントですか？」

「こんなことで嘘つくほど落ちぶれてねーよ。」

は、嘘はもうつきたくないしなって、すげー悲しそうな顔から目が輝いてる顔にすぐなった。

「良かった。あなたなら私の彼氏にぴったりです。」

「そうかい、そりゃよかった。」

「あ、それともう一つ。」

なんだ？もう滅多なことでは驚かないぞ。

「私は命を狙われています。」

「えっーーーーー！！！」

もう何なんですか。科学者かなんかを追われてるんですか。

「何に？」

「私と同じ化身の男にです。」

「なんで？」

「それは、僕が答えよう。」

違う方向からの声に振り替える。

「誰だ、お前。」

なんだこいつ、スーツに身を包んだ青年・・・・ッて感じでもねえか。

「失礼、僕の名前は亜科麒麟^{あしな きりん}。彼女と同じ化身だよ。」

「そうか、俺は須川 克だ。」

「って自己紹介してる場合ですか！あなた達は何で私を狙うんですか！」

お、すげー顔ってあいつやれやれって顔してるし、なんかムカつく。

「それはですね、我々化身の中では女性の化身は珍しいのですよ。」

「あゝ茶トラ猫のメスみたいなの？」

「そうです。」

ほ、なるほどね。

「それですね、化身はヒトとも子を作れます。」

「なるほどね、子供を作るために狙うつてわけでもねえな。」

「ですが、化身の能力を失ってしまうのです。」

「・・・化身同士だと能力が失われないと・・・。」

「ええ、それに能力が二人分の能力が合わさった子が生まれてくるんです。」

「・・・複雑だね。」

「ですので、その子を私に下さい。」

「なんだそりゃ！ですのてって・・・。」

「私はいやです！」

「だろうね。」

「・・・で、あんたはどうすんだ？大人しく帰るのか？」

「まさか。」

「だろうね。」

「無理やりにでも連れてきます。」

「だろうね。」

「・・・だろうね」が多いな俺。

「逃げますよ！」

「逃がしません！」

奴の腕が伸びて襲ってきた。

「うそ！」

「ちっ！」

女の子を抱えて横にとぶ、女の子は・・・てもうめんどくせえ！

「・・・月見。」

「えっ？」

「お前は今日から月見、おかの つきみ丘野月見だ。」

「丘野・・・月見・・・えへ。」

嬉しいのかにつこりと笑いやがる。

緊張感もってくれ。

「ほ」。避けましたか。」

おっ、笑顔が消えた、切り替え早いな。

「克さんは離れてください。」

「は？」

「ここは私が何とかします。」

月見は腕を構えてるが……。

「ダメだ。俺が行く。」

「何を言ってるんですか！あなたは人です！化身に勝てるわけ……。

」

月見の肩に手を置く。

「……震えてる。」

「……ッ！！！」

「……俺がやる、女の子を戦わせることはできない。」

「克さん……。」

ニコツと笑った方がいいのか？

「話は終わりましたか？」

「……ああ。」

「……まともに戦えるか？」

「ではいきます！」

言うが否や麒麟の手が伸びて襲ってきた。

—————別視点

「くっ！」

ギリギリかわした克。

今度は克が突っ込んでいくが、

「がっ！」

曲ってきた腕が克の頭に直撃した。

—————克視点

「ふふっ。何の化身か、教えましょう、麒麟です。」

「ぐっ・・・！麒麟・・・だと？」

名前のまんまだな・・・。くそ！フラフラする。

「麒麟って・・・あの首長いの？それともお笑い○人の？」

「首が長い以外いますか？動物ですよ？」

「やっぱりか・・・。」

「いや、でも、ありえねえ方向から来ただろ。」

避けてきたところから真後ろにな・・・。

「人には関節がありますよね？」

「？」

「僕の場合、好きなところに関節を作れるのですよ。」

「あゝ、簡単に言えば一回好きな角度に曲るってことか？」

「ま、そんなところです。」

・・・厄介だな。

避けても追撃が来る、しかもそのまんま攻撃もできる。

「一か八か！！！」

俺は突っ込んだ。

「ふっ、自棄になったのですか！」

腕が伸びてくる。

「くっ！」

ギリギリで横に避ける。

「無駄です！」

予想どおり！

「おりゃ！」

下にしゃがんで避ける。

「なっ！」

よっしゃ！

「一回だけだろ曲るの！」

あとは一発ぶん殴れば・・・。

そこで俺はやつと気付いた。

あれ？俺飛んでる？

そのまま頭から落ちた。

――月見視点

克さんは避けた、けど飛ばされた。
頭から血が出ている。

「あ・・・あ・あ。」

私は茫然とするだけだった。

――別視点

「ふふふつ、伸びるのは手だけと思いましたか？」
麒麟の足が伸びている。

「僕の手足は伸びるんですよ、ってもう聞いていませんね。」

――克

あれ？

あいつがなんか喋ってるけど聞こえね。
目が霞んできやがった。

意識が遠のく・・・。

・・・また・・・守れない・・・のか？

「克。」

母さん？あれ？小さい頃の俺？

「なぐに？お母さん？」

「いい？克。」

「？」

「あなたが守りたい物ができた時は全力で守りなさい。」
「え？」

「絶対よ。お母さんと約束。」

「うん！」

母さん・・・。

そうだ守らなきゃ。

「克。」

かあさん。

「力を使いなさい。」

力？

「あなたの・・・身とし・・・力。」

俺の力・・・。

「守るために使いなさい。」

ありがとう、母さん。

――――克視点

「まだ・・・負けてないぞ。」

「なっ！」

驚いてやがる、しかもバケモノを見るような眼で見るなよ。

「普通の人間なら死んでますよ。」

「あいにく、俺は普通じゃないからな。」

ああ、いま思い出した。

「俺も化身っぽいな。」

「ッ！！！」

やっぱ驚いたか。

「・・・うそですね。」

「なんでだ？」

「においです。」

におい？

「どう言うことだ？」

「我々は化身特有のにおいがあります。あなたにはそれが無い。」

「なるほど。」

「まあ、生きていたことはびっくりしましたが二度目はないですよ。」

「

「それは大丈夫だ。」

「？」

「もう、俺の勝ちだ。」

「戯言を!!!」

麒麟の腕が伸びて襲ってきた。

「ふっ!」

俺は両腕で麒麟の腕を掴んだ。

「なっ!」

「お返しだ!」

俺は両腕を引っ張って麒麟をこっちに來させた。

「うわっ!」

「くらえ!」

俺は思いつき蹴りを入れた。

「うごはぁ!」

腹にめり込んだ。そして壁に吹っ飛んだ。

「ぐっ。。。」

麒麟は腹を押さえながら立ち上がった。

「やっぱ頑丈だな。」

「くっ!やりますね。」

麒麟はフラフラになりながら言った。

「人にここまでの力が出せるとは、ですがこれで決めます!」

麒麟の足が伸びて薙ぎ払いをかけてきた。

「おらっ!」

俺は足を掴み突っ込んだ。

「くっ!無駄です!」

麒麟の腕が伸びてきた。

「何のために足掴んでると思ったんだよ!」

俺は麒麟の足を棒代わりにして避けた。

「なっ!」

「これで終わりだ!」

麒麟の顔面にありったけの力を込めて殴った。

「っ!!!!!!」

麒麟の顔面に当たり麒麟は吹っ飛んだ。

「があ！」

五メートルぐらい飛んだところで止まった。

「はあ、はあ。」

「克さん！」

月見が近づいてきた。

「おう、月見、オワ・・・タ・・・ゾ。」

そこで俺の意識が止まった。

第一話・出会い（後書き）

克「はいどうも。作者のバカのせいで遅くなりました。やっと更新できるだそうです。読んでみたら感想などください。」
作者：ほんとにすいませんでした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2033i/>

狼の少女

2010年10月9日05時15分発行